

(農)にここにこファーム新庄から始まる松江たまねぎの産地づくり

1. 取組の背景

(1) 松江市でのほ場整備を契機とした水田園芸の推進

新庄、大野、西長江地区において大区画ほ場整備を契機に、担い手確保のための集落営農組織の法人化と高収益作物として水田園芸品目(キャベツ・ミニトマト・たまねぎ)の導入を推進。



新法人設立のほ場整備地区 (R6年1月時点、設立予定を含む)

(2) 新庄地区で水田園芸品目を導入

先行する新庄地区では、R2年に(農)にここにこファーム新庄を設立。整備完了後のほ場約45haで、水稻栽培に加えて、水田園芸品目(たまねぎ)を導入。

2. 取組の経過及び概要

(1) (農)にここにこファーム新庄でモデルとなる取組を開始

① 高収益作物として「たまねぎ」を選定

機械化一貫体系が既に確立されており、水稻と繁忙期が重ならず、労力分散が可能。

② 「たまぷろチーム」(R2.4月)を結成

園芸作物の栽培経験のある営農部長がチームを牽引し、先進地視察や栽培研修会等を実施。地域の女性や高齢者が多数参画し、育苗や調製を担当。

③ 「チーム新庄たまねぎ」がサポート

松江地区全体でのたまねぎの産地化につなげることを視野に入れ、松江市、JA、県の関係機関担当でサポート体制を構築。

④ 機械化体系を整備

目標とする5haに対応できる中規模機械化体系を整備。



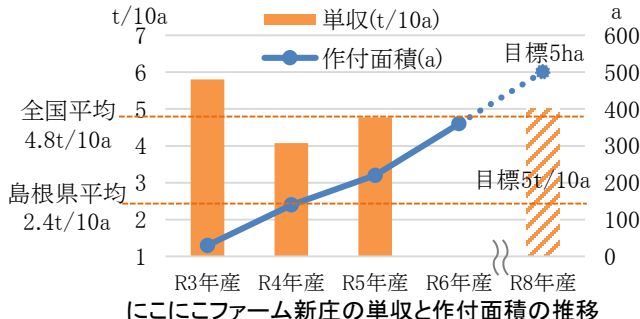
たまねぎ収穫の様子

(2) 他地区へ波及と「松江たまねぎ産地ビジョン」づくり

新庄に続く、大野・西長江のほ場整備地区での取組みに波及させ、松江地区全体でのたまねぎの産地づくりビジョンを明確にし、産地としての仕組みづくりや生産部会の設立に繋げることが必要。

3. 取組の成果

(1) 安定した収量確保による着実な作付面積の拡大
県平均を上回る単収の確保と、機械化体系導入による効率の良い生産が可能となり、順調に面積を拡大。



(2) 松江地区の「収益モデル」と「産地ビジョン」の提案

新庄の実証をもとに、5haの中規模機械化体系における「たまねぎの収益モデル」と松江地区全体の「松江たまねぎ産地ビジョン」を提案し、関係機関で合意形成。

科目	円/10a
収入	
売上	575,000
収量(kg)	5,000
単価(円/kg)	115
産地交付金	50,000
合計	625,000
支出	
資材費	122,332
減価償却費	33,425
動力光熱費	10,000
施設利用	100,000
販売経費	224,375
人件費(1000円/時)	61,800
合計	551,932
所得	73,068

【モデルの根拠】
単価: JAしまね青果市場向けたまねぎ過去5年加重平均/資材費・動力光熱費: 新庄R4~5年実績/減価償却費: 5haモデル機械体系/施設利用・販売経費: JAしまね広域玉葱調製保管施設利用料/人件費: 目標61.8時間

初めてのたまねぎ大規模栽培で苦労は多かったですが、営農部長率いるたまぷろメンバーや組合女性部の活躍で目標の収量を確保できました。引き続き5haまでの拡大に向けて取り組んでいきます。

代表者から一言



ここにこファーム新庄 津森代表理事組合長

4. 課題と今後の取組方向

- (1) 排水、雑草、石礫、連作障害等の対策を徹底し、目標単収5tを確保。
- (2) 人員配置の見直しや機械を集落内外で最大限活用する等によるコスト削減と販売単価を確保することで、収益性を向上。
- (3) 「松江たまねぎ産地ビジョン」の実現に向け具体的な取組を明確にし、実践に移行。